

デジタル化社会における写真の意義に関する研究

A Research on Meaning of Photographs in Digitized Society

1W143012-1 宇田川 咲季 指導教員 長 幾朗 教授

UDAGAWA Saki

Prof. CHO Ikuro

概要:本研究では、デジタルおよびアナログカメラによる撮影者の撮影行動と表現の差違について検証した。写真館へ行かなければ写真を撮ることができなかった時代と比べて、現在はスマートフォンやデジタルカメラの登場によって写真撮影の自由度が上がったと考えられる。それにより、撮影の表現や写真の質が低下しているとの評価もある。また、スマートフォン等による撮影行動の変化やデジタルメディアの普及により、自撮りなどの被写体や写真の共有方法や鑑賞行動も変化しつつある。写真が客観、客体としての存在から撮影者の主観や主体としての表現へと進化している。このような現状における写真の存在と意義、そして新たな写真表現の可能性について考察した。

キーワード：撮影行動、インスタ映え、自撮り

Keywords: photographing activities, instagrammable, selfie

1. はじめに

フィルムカメラからインスタントカメラ、デジタルカメラと時代の流れによってカメラが進化したことにより「写真を撮る」という行為は誰でも、気軽にできることへと変化している。現在はデジタル化が進み、画面を通して写真を見ることや共有することが多くなってきている。その結果、カメラが誕生した頃は現実を写すものが写真であったが現在は写真そのものの価値が人に見せて自慢するものや共有して楽しむなど鑑賞形態も大きく変化している。今日、私たちは無意識のうちに写真を撮るといった行為をしていることも少なくない。この行動によって撮られた写真にはどのような価値が生まれるだろうか。本研究では撮影の自由度やシチュエーションにより写真の価値がどう変化したのか着目した。

2. カメラの歴史

1839年に世界で初めて写真法が確立した。しかし、写真機の元となるカメラ・オブスキュラの原理を錬金術師のファブリシウスが1552年に発見していた。また、1816年にはフランス人のジョセフ・ニセフォール・ニエプスが実験を行い、1827年のものが最古の写真とされている。[1] カメラは日々発展していき、ダゲレオタイプから1850年代にはコロジオン湿板法が誕生した。これはダゲレオタイプの良い部分とカロタイプ

のネガ・ポジ法を組み合わせられたものと言われていた。1870年代には乾板法へと変化していき、湿板法に比べて簡単であったため普及していった。そして、1890年代には現在も使われているフィルム法が生まれ、1990年代には銀塩乳剤からCCD、フィルムのデジタル化へとさらなる進化を遂げる。[2] カメラの周辺がデジタル化されたことによりカメラの小型化や撮影場所、共有方法が変わったため、写真の種類や撮影者が変化していった。カメラがアナログからデジタルへ移行するのはもちろんのこと、写真も白黒からカラーへと変化していった。



図1 ダゲレオタイプで撮影された写真 [3]

3. 現在のカメラでの撮影

一眼レフカメラといえば交換レンズがあり、撮影モードを設定できるなど便利な部分がたくさんある。1925年に誕生したライカI型は初めてカメラのボディとレンズが別になったカメラである。1981年に製造されたソニー・マビカは完璧なデジタルカメラの一手前のものだった。撮った写真をフロッピーディスク

に保存できるということで当時は話題となった。1986年に富士フィルムから発売された「写ルンです」はカメラを買うことが大きな出費であるという概念を覆した。発売当初は批判が多かったと言われているが、サイズ感やどこでも買える、誰でも簡単に撮れるという利点が評価された。1994年にはアップル・クイックテイク 100 が発売された。結果的にアップル・クイックテイク 100 は衰退してしまっただが、のちにこのカメラが世界的に有名となる iPhone の先駆けとなった。[4] この iPhone の登場により、本来は観察者であった撮影者自らが自撮りするという新しい行動が生まれた。それがセルフィーである。写真が客観、客体としての存在から撮影者の主観や主体としての表現へと大きく変わりつつある。



図2 写ルンです

4. 写真の存在意義

写真機やカメラの歴史と共に写真も変化している。スタジオや舞台を作ってから撮る写真はまるで演劇や絵画のようであった。カメラが小型化してからはアルベール・カーンが観光、紀行写真を撮ることによって写真の表現の幅が広がった。カラー写真が登場すると広告や雑誌、報道などにも写真が掲載されるようになり派生していった。そして今日の Instagram の現象であるインスタ映えは以上のような紀行写真やドキュメンタリー、ファッション写真への発展と変化からの派生だと言える。ブログのように長々と文章を書くのではなく、端的にかつビジュアルを加えることで簡単に自分の状況を伝えることができるのが現在の SNS の形である。

5. 実験

本実験は8人の健常者成人(男性3名、女性5名、年齢20代)を対象に行った。デジタルカメラとアナログカメラでの撮影を2人1組で15分間自由に行ってもらい、撮影した写真に関してSD法の印象評価と

アンケートによる主観評価を行なった。また、実験に当たって3つの条件を提示した。

(1) 風景、被写体が1人(お互いの写真を撮る)、被写体が2人(自撮り)の3種類を必ず撮ること

(2) デジタルカメラの枚数制限はなし、アナログカメラの枚数上限は27枚

実験の結果、デジタルカメラとアナログカメラにはどちらも長所と短所があり、撮影する機材によって写真の印象が変化することがわかった。アンケートではデジタルカメラにおいて枚数を撮りすぎてしまうことが挙げられた。この点に関してカメラ側から枚数を撮りすぎていること、同じ写真が多いことを表示することによって改善されることが考えられる。

6. 結論

デジタルカメラとアナログカメラでは長所と短所があり、双方の良い部分を集めることで写真の価値は上がってくると考えられる。写真というのは誰かに見せたいという気持ちも大切だが何か取って置きたい、思い出に残したいという気持ちを持って撮ることで見返したときにより価値が上がるのではないだろうか。今日の Instagram における写真の投稿が今後さらに発展し、インターネット上やスマートフォンで共有した写真を組み合わせることで新しい写真を生み出すという表現が生まれるかもしれない。アナログの時代には表現することができなかった新たな写真表現が今後誕生することを期待したい。

参考文献

- [1] エアロン・シャーフ 著,小沢秀匡 訳『写真の歴史』 p.13
- [2],[4] マイケル・プリチャード 著,野口正雄 訳『50の名機とアイテムで知る 図説カメラの歴史』 p.6-213
- [3] The New York Public Library (<https://digitalcollections.nypl.org/items/510d47d9-aeb1-a3d9-e040-e00a18064a99>), 2018年2月8日閲覧

図表出典一覧

図1 ダゲレオタイプで撮影された写真 The New York Public Library (2015)

図2 写ルンです 宇田川 (2018)